

第 73 回新潟癌治療研究会

日 時 平成 25 年 7 月 27 日 (土)
午後 1 時 30 分
会 場 チサンホテル & コンファレンス
センター新潟 「越後東の間」

2 口腔扁平上皮癌とその境界病変における術中迅速病理診断の意義：再発に関する臨床病理学的検討

御代田 駿・小林 孝憲・宮島 久
小林 正治・高木 律男・丸山 智
朔 敬

新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面口腔外科学分野

I. 一 般 演 題

1 口腔乾燥と白板症の観察中断後に発症した下顎歯肉癌の 1 例

小田 陽平・船山 昭典・新美 奏恵
芳澤 享子・新垣 晋・小林 正治

新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔生命科学専攻顎顔面再建学講座
組織再建口腔外科学分野

口腔乾燥症と白板症のため受診し、その約 5 年後に下顎歯肉癌を発症した症例を経験したのでその概要を報告する。

症例は 72 歳、女性。口腔乾燥と上顎歯肉の発赤を主訴に 2007 年 4 月に来院。両側上顎臼歯部歯肉に発赤および白色変化を認め、生検の病理組織学的診断は軽度異形上皮で、補綴物の除去後に症状の改善を認めたため、2010 年 2 月を最後に観察を終了とした。2012 年 1 月に肺癌 (T1N0M0) のため当院胸部外科において腫瘍切除術を施行された。また、腎がん (T1N0M0) も指摘されたが、病変が小さく経過観察となった。同月入院中に口腔内違和感のため当科を再受診したところ、右側下顎臼歯部に歯肉癌 (扁平上皮癌, T4N2bM0) を認め、同年 2 月に下顎骨区域切除術、頸部郭清術および術後放射線療法を施行した。現在まで再発なく、経過観察中である。

【考察】口腔癌と白板症の部位は異なっていたが、口腔全体としての発がんリスクは高かったものと思われ、観察継続の重要性を再認識した。

口腔扁平上皮癌および悪性境界病変の再発要因を解析するため、2002-07 年に当院にて切除された同疾患 238 例の切除断端について、術中迅速診断と手術材料の最終診断を比較し、五年以上の経過を評価したところ、45 例 (18.9%, 152 検体) の再発群と 193 例 (81.1%) の非再発群に分けられた。術中診は各々 83 病変 (54.6%), 130 病変 (67.4%) で行われていた。術中診では、中等度異型上皮以上の再発危惧病変が、非再発群で 55 病変 (42.3%; 37 病変で追加切除)、再発群では 57 病変 (69.5%; 38 病変で追加切除) の露出があった。最終診では、それぞれ 51 病変 (39.2%), 60 病変 (72.3%) の露出があった。以上の結果から、術中診の結果で術野拡大を実施した群では、最終診での病変残存率が低下し、再発率が押さえられていることが判明し、同疾患での術中診の必要性が再確認された。

3 顎骨切除を行った口底および頬粘膜がんの局所再発の予測因子

新垣 晋・金丸 祥平・船山 昭典
小田 陽平・三上 俊彦・芳沢 享子
小林 正治

新潟大学大学院医歯学総合研究科
組織再建口腔外科学分野

口底および頬粘膜がんはその進展により顎骨浸潤をきたすことがあり、切除に際しては顎骨切除の要否が問題となる。今回は顎骨切除を行った口底および頬粘膜がん 25 症例について局所再発の予測因子 (T 病期, 分化度, 組織学的顎骨浸潤,